

憲法と映画(116)『エレノアってグレート。』 アメリカ

<かな>



神戸映サが3月例会で取り上げた『フィルムがゆく！93歳のやさしいバズ』で、オレオレ詐欺にあった93歳の高齢女性が電動自転車で颯爽と事件を解決する痛快活劇はご覧になった方もいることでしょう。同じ主人公役のジューン・スキップが今度は、96歳にも関わらず主演を演じた映画をご紹介します。

主人公のエレノアと11年間寝食をともにした親友・ベッシーが亡くなるころから映画は始まります。一人娘がニューヨークに大学生の息子とマンション暮らしをしていて、エレノアは余生を娘の住居に同居することになります。しかし娘は仕事が忙しくて高齢の母親の相手をする余裕がありません。時間を持て余して一人で散歩に出かけたエレノアは、ひよんなことから「ホロコースト生存者の会」に誘われるまま参加することになります。体験者が車座になってそれぞれの生死を分けた体験談を語るという会で、エレノアはベッシーから聞いたホロコーストに向かう列車から脱走した兄の凄惨な最後や母親との別れなどを、さも自分が体験したかのように語ったことがきっかけで一躍注目されてしまいます。たまたま生存者の会に参加していた大学生・二ナは、彼女の話にいたく感動して二ナの勧めで大学や教会で講演する機会まで訪れます。

私も毎年開催される「ピースフェスタ明石」で戦争体験談を語る会に参加しています。高齢化でお話ができる方が年々減ってしまって、戦後生まれの中国残留孤児の子どもさんに中国人に預けられた母親の体験や日本に戻ってからの苦労話を聞いたりしています。

エレノアのしたことは、「ウソの体験談」の一言で片づけられません。実体験ではないにしてもベッシーに代わって体験談を語るいわば「語りベ」の役割を果たしたといえるでしょう。半年前に母親を亡くして思い出すたび涙が溢れ、ニュースキャスターの父親との関係もギクシャクしている二ナの心は、エレノアと触れ合う毎にゆっくりと解放されていくのです。

親友ベッシーを失ったエレノアの喪失感彼女の体験を第三者に語ることで、最愛の母親を亡くした二ナはエレノアと出会って優しい言葉に包まれることで、お互いに深い悲しみから希望の光が見え人生を前に進める確かな原動力となっていくのです。